

# 高大接続の課題に迫る

関西学院大学は2015年4月、入試部を改組して高大接続センターを設置した。高校との連携を円滑にし、具体的な取り組みで把握した高校現場の変化を入試改革、教学改善に結びつける狙いがある。体制整備の背景と連携事業の内容、今後の入試改革について取材した。

## 関西学院大学

# 高大接続センターを設置し 組織的な高大連携と入試改革を推進

### 組織再編で 高校現場の状況を把握

関西学院大学の高大接続センターは、従来の入試部（入試課、AO入試課、入試広報課）を改組し、高大連携課と入試課の2課体制に整備したものだ（図表1）。同センターは、主にスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校やスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校を中心とした教育連携校に教員や学生を派遣し、課題研究授業を支援する。アクティブラーニングの普及状況や授業でのICTの活用状況など、高校の教育現場の変化をいち早く学長室や各学部、教務機構と共有し、自学の教学改善にもつなげるという。加えて、そこで得られた知見は入試改革にも生かす考えだ。

### ワンストップの体制を整え 高校からの要望に対応

改組の背景には、2014年末に出された中教審の答申\*1と、「高大接続改革実行プラン」への対応がある。高校の教育現場の変化や要望を十分に把握できず、連携が十分でないという自学の課題認識もあった。中教審の答申が発表される以前に、学長、副学長を含む執行部が、関西圏の教育連携校を訪問する機会があった。執行部は視察を通して、高校の教育現場にアクティブラーニングが定着しつつある状況を目の当たりにした。加えて、スーパーグローバル大学である自学との連携に、高校側が強い期待を寄せていることを認識し、連携強化を図る必要性を感じたという。

同大学はこれまで、高大連携の取り組みを実施してきたが、多くは高校からの依頼を受けた部局がそれぞれ行っていた。学内での情報共有がなされていなかったため、他部局が対応可能でも依頼を受けた部局の都合で断るケースもありえたという。高大連携課の設置で、ワンストップ型の学内横断的な体制で、高校の要望により柔軟に対応できるようになった。

この役割を入試部が担うこともできたが、「そこには問題があった」と高大接続センターの尾木義久次長は説明する。「入試部が窓口になると、高校に学生募集活動の一環と認識される可能性が高くなる。本学としては、それは本意ではない。高大連携はあくまで教育活動の一環として考えている」。

この考えの背景に、同大学のスクールモットー“Mastery for Service（奉仕のための練達）”がある。スーパーグローバル大学として育成する人材には、課題発見力や解決力、自立心が求められ、これらを高校段階から身に付けさせようと考えた。そこで、大学のノウハウや人的リソースを、教育（奉仕）

目的で高校に提供し始めた。「高大連携の目的は、高校生が大学への理解を深めることではなく、大学レベルでの深い学びを体験すること。本学への進学が前提でなくても、学び中心のあるべき高大接続が実現できればそれでよい」と尾木次長は言う。

### 自学のリソースを把握し 新たな連携提案につなぐ

同センターが実施する高大連携の取り組みは多岐にわたる。特に積極的に取り組んでいるのは、教育連携校の課題研究授業への教員派遣だ。高校課程の内容を超える分野を大学教員が指導し、高校生の活動をサポートする。教育の一環としているため、従前、模擬授業として引き受けていたものも生徒には事前学習と事後レポートを課す。

高校に学生を派遣するワークショップでは、高校生の課題研究への助言も行う。同大学は2004年度から国連と協力するボランティア・プログラムを行っており、JICA\*2等との連携によるものも含め毎年50人程度を国際貢献活動に送り出している。ワークショップでは大学生がその活動経験を高校生に伝え、驚きや感動を共有する。

また、高校ではなく大学側で行う活動にも、（課題）研究発表会、キャリアフォーラム、ワークショップなど、さまざまなものがある（図表2）。

これらの取り組みは、参加した大学側の教員や学生にもよい影響を与えている。教育連携校で授業を担当する中で、高校生の積極的な姿勢を目の当たりにして大きな刺激を受ける教員もいた。ワークショップに参加した学生は、体験を語ることで自身の活動の意義に

図表2 高大接続センターが学内で実施する取り組み(2015年度) ※一部抜粋

形式	実施日(予定)	対象者	取り組み名称	内容
研究発表	11/20(金)・21(土)	高校生・大学生・大学院生	RESEARCH FAIR 2015 SCI-TECH RESEARCH FORUM	総合政策学部・理工学部が主催する問題発見・課題解決をテーマとする研究発表会。課題研究に取り組む高校生も参加。
課題研究発表会	3/21(祝)	高校生	第1回近畿地区SGH・アソシエイト校課題研究発表会	近畿地区のSGH校、SGHアソシエイト校の生徒が課題研究の発表会を他校の生徒と共に実施する。
キャリアフォーラム	12/19(土)	高校生・大学生・大学院生	キャリアフォーラム「国際機関で働く」	将来、国際機関や外務省等で働くことをめざす高校生・大学生・大学院生のためのキャリアフォーラム。外務省や国連各機関等が一堂に会して実施。
ワークショップ	12/19(土)	高校生	PROJECTION MAPPING WORK SHOP	教員・大学生と高校生がワークショップで、大学の時計台に投影する映像作品の制作に取り組む。
シンポジウム討論会	1/23(土)	高校生	EUJ 関西シンポジウム	神戸大学・大阪大学とのコンソーシアムであるEUJ 関西主催のシンポジウム。講演のほか、「難民」をテーマに高校生が討論会を行う。

ついて認識を深めたという。

加えて、自学の教員が取り組む研究分野の多彩さも再認識できる。尾木次長は言う。「ある高校からイスラムをテーマにした授業依頼があった。本学はキリスト教主義の大学であり、イスラムの研究者はいないと思っていたが、調べてみると複数いることがわかった。センターが教員の研究分野を把握することで、高校の要望により適した教員の派遣が可能になるし、新しい連携提案にもつながるだろう」。

### 専門スタッフを育て 総合的評価の入試を開発

同大学は高大連携とともに、多面的・総合的評価による入試改革にも取り組んでいる。それを担う入試課は、13人全員が高大連携課と兼務だ。2014年度から、英語の題材を使った論述方式や小論文などを課すグローバル入試\*3を実施しており、2016年度からはSGH指定校、SSH指定校を対象にした公募制推薦入試を導入する予定だ。

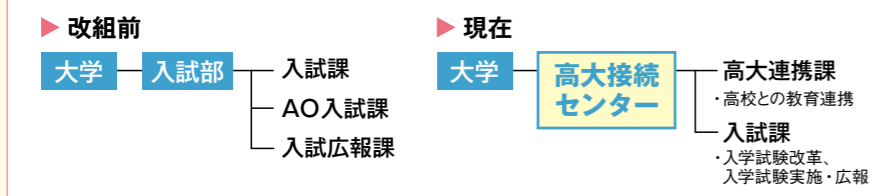
今後は一般入試において、学力の3

要素を測る手法を確立することが課題だという。「知識・技術」は従来のペーパーテスト方式で、「思考力・判断力・表現力」は記述式の問題に改良を加えれば対応できるが、「主体性・多様性・協働性」は面接やグループワークを課さないと評価できない。志願者が2万人以上いる同大学では、その全てと面接をするのは不可能だ。

そこで、独自にアドミッションオフィサーを育成・認定し、プレエントリーの段階で受験生を面接する計画を構想中だ。現状では国としてのアドミッションオフィサーの定義が明確でないため、必要な能力の定義と研修プログラムの開発に率先して取り組むという。尾木次長は言う。「ガラパゴス化した日本の入試を変えなければならないという認識を持っている。大学の思惑が進めるのではなく、高校と連携して適切な評価手法を探っていきたい」。

総合的評価の手法確立は1大学だけの課題ではない。関西学院大学は積極的に新しい手法を導入して成果を公表し、他大学と連携しながら精度を高めていきたいとしている。

図表1 入試部から高大接続センターへの組織再編



\*1 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」  
\*2 独立行政法人国際協力機構。日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として、開発途上国への国際協力を行う。

\*3 「国際貢献活動を志す者のための入学試験」「英語能力国際交流経験を有する者を対象とした入学試験」「国際ナショナルバカロレア入学試験」「グローバルキャリアを志す者のための入学試験」「グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験」の5カテゴリがある。それぞれ出願資格、審査方法は異なるが、全てのカテゴリで面接もしくは口頭試問を課す。